地域クリエーターの履歴書

地域クリエーターの探究家

栃尾 圭亮(とちお・けいすけ)
船井総研入社後、地域創造・活性化チームに志願し、創設に情熱を注ぐ。現在は、地域再生行脚100を実践し、成功事例を求めて全国を渡り歩く。
連絡先:keisuketochio@funaisoken.co.jp

『企業の将来はトップで99%が決まる』(船井幸雄)と言われるが、
その企業体と同様に、地域にも組織を導くリーダーが存在する。
あふれる情熱と哲学をもって、地域活性化に挑む地域クリエーターの本質に迫る!

第12回

“モテル地域”が活性化する

堀 忠雄氏 和束町 町長 京都府相良郡和束町

HORI TADAO'S PROFILE

年代	出来事
1966年	立命館大学　法学部　卒業
	繊維会社に入社
1970年	和束町の実家に戻り、役場に入庁。
	企画管理課長
	福祉課長
	産業経済課長
	活性企画部長
	経済建設部長を歴任
	在職中に自治大学に入学(1976年)
2001年	町長に当選、
2005年	町長に2選し、現在に至る

和束茶ノススメ お茶は少量で飲むべし

今回の舞台は、京都駅から約１時間の距離にある京都府和束町。和を束ねるという奥ゆかしい地名を持つこの地域の特産は、なんといっても日本茶。和束を含む宇治一帯に近づいていくと、通常の飲食店でさえ出してくるお茶の味が違う。「このお茶、おいしいですね!!」という言葉に「宇治ですから!!」という、さも当たり前だといわんばかりの冷静なコメントが返ってくる。和束町一帯はそんな「日本のお茶」をしょってたつ誇り高い地域である。

今回の注目クリエーターはそんな中で、和束のお茶をブランド化するために動き回る名物町長・堀忠雄氏。「女性にモテナイ地域は活性化しない」をモットーに、神戸女子大、同志社女子大との交流を深め、多くの女子大生にモテル地域を創出しょうと試みている。しかしそういったキャッチーな言葉とは裏腹に、このまちの施策は実に奥深い。お茶製造のため関西一の規模を誇る製茶工場の建設や、関西を代表する一流ホテル「リーガロイヤル」と提携したフレンチ懐石など、ユニークな施策を次々に打ち出し徐々に和束の認知度は上昇している。では堀氏の思い、その原点はどこにあるのだろうか。第12回は、茶畑の美しい和束町にて探った堀氏の思いの原点、その先にあるものを特集していきたい。

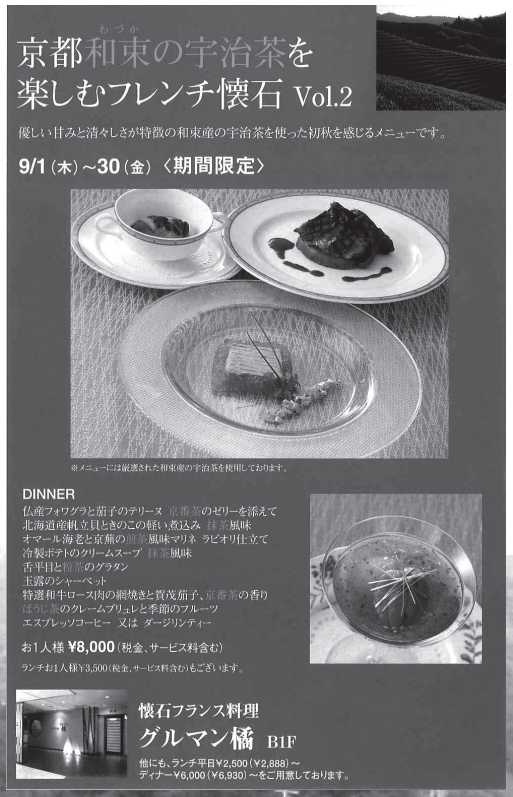
「ホンモノを大切にする心」が原点

様々な施策を打ち出していく堀氏。表面上では「モテル地域」を目指す町長として、いつも人々から好感を持たれている堀氏だが、その思いは深い。都会に林立するビル群、そして和束町に息づく茶畑に彩られた風景の対比が、その「ホンモノを大切にしたい」という思いを如実に表す。

杤尾 今日はわざわざお時間を頂き、ありがとうございます。しかしすごい地域ですね。「トンネルを抜けると…」ではありませんが、まさに「峠を越えると茶畑だった」でしたよ。

堀氏 そうでしょう、そうでしょう。このごろ、「海外旅行と国内旅行が同じ値段、⇒ それじゃあ海外へ」なんて風潮ですけれども、さすがにこれだけの茶山（茶畑の山）が残る風景は海外にもありませんよ。

杤尾 そうですね。盆地を取り囲む山一帯が茶畑ですもんね。これだけの地域は私もこれまでに見たことがありません。しかし、よくこれだけの風景が残りましたね。



和束のお茶を使ったフレンチ懐石

峠を越えるとそこは茶畑だった

堀氏 結果として町にこの風景が残ったのは確かですが、正確に言えば、茶農家や役場を含め、町が一丸になっているからこそ、こういった風景が残せるんですよ。

杤尾 なるほど、そこらへんに堀さんの和束町への原点もありそうですね。どうして、そこまでこの茶畑にこだわられるのですか。

堀氏 それは、この茶畑こそが日本を代表する文化だと考えているからです。

考えてみてください。

例えば、都会では今どんどん高いビルが建っていますが、建つのにどれだけかかりますか。おそらくたった1年か2年でしょう。それだけ、技術は進歩し地方を圧倒するような風景が都会には広がっています。これはこれで良いことでしょう。

しかし、どうでしょうか。そのことだけが本当に我々が大切にすべきホンモノでしょうか。

私は違うと思います。

私達が大切にしている茶畑。この風景を作るには、30年も40年もかかります。実際、この地域では鎌倉の頃からこのお茶の栽培に取り組み、その結果として現在の和束があります。しかし、この和束の茶畑から後継者がいなくなれば、どうなるでしょうか。

おそらく1年間放っておくだけでも、風景そのものが消えてしまいます。そしてたとえ運良く後継者が見つかっても、それを元に戻すためにはまた10年も20年もの月日がかかってしまうのです。

杤尾 では、堀さんは残すべき本物は地方にこそあるとお考えなのでしょうか。

堀氏 その通りです。

現在、多くの人は景気の向上もあって都会で豊かさを享受していますが、その豊かさはどうも表面上の、お金が右から左に動くような豊かさに思えてなりません。

本当の豊かさとは、こういった何十年も培って完成した茶畑が一瞬見せてくれる素敵な風景にこそある、私はそう思っているんです。今なお息づいている茶畑がおりなす農村空間に感謝いっぱいであります。

そういった思いがある意味、これまで私を動かしてくれたのではないかと思います。

茶畑の喪失は文化の喪失である

ホンモノとはこの地方に眠る茶畑である、という気付き。しかし堀町長もすぐにこれに気付いていたわけではない。徐々に若者が町から減っていく、そして荒廃していく様をみていたからこそ、その危機感が和束への思いへと変わったのである。

杤尾 堀さん、しかしそういった思いをこの町に居続けながら持つことはなかなか難しいですよね。いつごろそういった思いを持つようになったのですか。

堀氏 農政課の仕事をしていたときだったと思います。

実は私はずっとこの和束にいたわけではないんです。大学を卒業してから3年ほどは、大阪にある民間の繊維会社につとめていました。しかし長男ということもあって和束にもどり地元の役場に入庁した。

そのころからでしょうか。徐々に若者が減り始めたんです。町から元気がなくなっていく、茶畑が徐々に荒れていく。それを見ていると、このお茶という作物、茶畑という風景の喪失が和束にとってだけではなく、地域全体、いや日本全体の文化の喪失に思えてきたんです。

杤尾 日本文化の喪失ですか。

堀氏 ええ、ちょっと大げさに聞こえるかもしれませんが、上質なお茶の喪失はすなわち文化の喪失につながります。

例えば、去年、ブッシュ大統領が京都を訪問しました。お茶は宇治、つまり和束を含めこの一帯のお茶です。もし、次のサミットが京都で開かれるとしたらどうでしょう。世界の要人の口に入るのもおそらく宇治茶です。それ

役場にもお茶はつきもの

関西一といわれる精茶工場

日本の文化とも言える茶畑は圧巻である

だけ、外国に誇れる文化として日本のお茶文化、その中の宇治茶があるわけです。

「モテル地域」が活性化につながる

「どうにか和束にお茶文化を残したいが、良い方法がない」。思い悩んだ末に至った結論こそが「モテル和束」の創出であった。では、次のその施策の内側を覗いてみよう。

杤尾 しかし、そういった堀さんの思いにもかかわらず人はどんどん和束を離れていってしまう。ではどうやって活性化を達成しようとしたんですか。

堀氏 悩みますね。やっぱり都会は若者にとって魅力的ですからね。それでも考えて考えて、これまで進めてきた方策は二つです。

一つは、これ以上の流出を止めるために、農家が儲かる仕組みを作る。

もう一つは、町をサポートしてくれるサポーターを作る、特に女性‼　つまり、女性にモテル地域を作ることです。

杤尾 それは、面白いですね（笑）。またどうしてサポーター、しかも女性なんですか。

堀氏 サポーターとは、和束の町を応援してくれる人たちのことです。住民を増やす、という施策もありますが、それはいわば「ホップ、ステップ、ジャンプ」の一番最後「ジャンプ」の段階で一番難しい。まず実行に移すべきなのは、自分たちの応援団をたくさんつくる。もし移住という選択肢があるならば、それは応援団が応援した結果、自然に選び取る選択肢であるべきです。

また、女性を選ぶ理由はいくつかあります。まず女性は消費にとても敏感ですよね。しかも女性は年をとっても元気で、消費の決定権は女性にこそあります。女性をひきつければ、自ずと人気が出てくる。そう考えたのです。

杤尾 それで、具体的な仕組みとして…。

堀氏 そうです。二つの女子大「同志社女子大」「神戸女子大」と色々な試みを実施中です。今はまだそこまでの成果はでていませんが、最終的には向こうから大量の女子大生に来ていただくようにしたいですね。

農家がもうかる仕組みとしては、廃校となった小学校の跡地を提供して、JA で製茶工場をつくりました。和束は、お茶の産地としては非常に古いために、各農家が自分でお茶を製造していたのですが、どうしてもそれでは利益が出ない。それでこの工場を作ったのですが、当時の規模ではこの工場は関西一の大きさといわれていました。そして、

現在は結果としてお茶農家で年商１億円を稼ぐ農家が現れ始めている。これを聞いて、やっていけるだろうという予想は確信に変わりました。

朽尾 リーガロイヤルホテルとの提携というのもありますね。こちらも女性を意識しているのでしょうか。

堀氏 こちらも、女性にモテルためのフレンチ懐石、といいたいところですが、どちらかというと私達のまちおこしの新しい考え方「一村一社運動」からでてきた施策です。これまで、一村一品運動という方向性がありました。しかしこれからの激動の時代、一村や一町で一品を作るには限界があります。そこで、村や町が民間の活力に富んだ企業と提携して、知恵を出し合い、まちおこしが出来ればと考えています。

リーガロイヤルを選んだ理由は、このホテルが、関西が手塩にかけて育ててきた代表的なホテルだからです。

このフレンチ懐石も大変好評で、今度東京でも開催されますよ。朽尾さんも彼女と一緒に食べにきてください。

Peace Handing Tea を目指して

徐々に知名度を高めていく和束町。その方向性は、世の中を平和で満たす「和を束ねるお茶 =Peace Handing Tea」を世に出していくこと。その目的に向かい、徐々に和束は進んでいく。

朽尾 今日は、長い間ありがとうございまいした。最後に質問ですが、こういったユニークな施策を展開する先には、何があるんですか。

堀氏 朽尾さん、和束茶、英語で言うとどうなりますか。

朽尾 ？？？　英語ですか、和は Peace 束は…。

堀氏 そう、Peace Handing Tea です。和束という名前自体にこめられたこの思い。これを日本だけではなく、世界に発信していければ、と考えています。今は、まだまだ小さな動きですが、先ほど申し上げた「一村一社運動」が実を結べば、きっとそういった大きな動きも可能になると思います。

我々は日々、都会にあつまる美しい日本文化の数々に目を奪われ、舌鼓を打つ。しかし重要なことは、それらの文化の背景には、文化をはぐくむ大切な土壌があるということ、そしてそれらは長い時間をかけて大事に育てられてきたということである。和束町長 堀氏の強みは、「一村一社運動」という新しい動きによって、その重要性をある種のキャッチーな言葉にのせ、都会の人にも訴えかけるセンスと手段を持っていることである。

「伝えたいことが情報ではなく、伝わったことが情報」とは船井総研社長である小山の言葉である。地域クリエーターの大切な条件、それは地域の重要性を理解しながら、それを適切な言葉で伝えることができる、そのセンスと能力ではないだろうか。

誇りあるお茶のプロ達との語らい